

〔特別講演〕

## 一 生化学者の歩み 一 実験研究の指針を求めて一

千葉大学 名誉教授 橋 正道

このたびお薦めにより、千葉医学会で、標記の題でお話しをすることになりました。初め、現役より退いて20年近くになる私の話に新味はないと思案しておりました。しかし身を起こして見回すと、最近の世界情勢に人類の進歩は認められず、また、わが基礎科学の世界には、私共の世代には受け取りにくい不愉快な流れが生じているようです。それならば、我が世代—少年期に戦争とその終結による社会の激変を経験し、自分の外側にある権威、名声、富みに信を置けず、自分の心の中に小さな灯をともし、それを頼りにこつこつと生きて来た世代の考え方にも出番はありうると考えました。身分、勤務地、研究への考え方に遍歴の多かった私の折々の出来事、出会いを軸にして心の旅をご紹介する予定です。ここでの記述はその一部です。

余り堅いことを言うと、「少年よ、大志を抱け」また「夢を持ちなさい」という励ましに反するという意見もありえますが、あの名山に登ろうなどという目標が夢であり、私が議論したいのは、そのための山道の歩き方、崖の上り方なのだとお受け取り下さい。

私は昭和29年に東京大学医学部を卒業し、内科医になるという将来目標を持ち、その前に体の基礎を知りたいと卒業研修の後、昭和30年に大学院に進み、栄養生化学を専攻しました。低分子生体物質の分析法、クロマトグラフィー、<sup>32</sup>Pを用いたトレーサー法など、国内ではかなり恵まれた教育を受けました。しかし、第2次大戦による研究の空白は余りにも大きかったです。まだ国は貧しく、輸入に強い制限もあり、最新の機器、試薬がありません。技術の伝承も途絶えています。外国、おもに米国の最新の論文を読んでも、単なる言葉の翻訳に過ぎず、実験を真似することもできませんでした。米国での生化学の流れは代謝酵素

学のピークを越え、すでに分子生物学の萌芽がありました。

大学院を終えた私は、東大に職なく、京都大学の医化学教室に1年期限の助手として勤務しました（昭和34年）。教室主任の早石 修教授（昭和17年大阪帝大卒、後に文化勲章ご受章）は、戦後間もなく米国に渡り、10年間、厳しい修行を重ね、昭和33年に京大に迎えられ、日本の生化学界に新風を吹き込まれた方です。ここでの修行は私にはまさに驚天動地でした。近代研究にはそれに応じた機器と試薬が必須なこと、さらに情報入手と頭脳訓練のための厳しいセミナー、雑誌購読会を教わりました。休みなしの毎日、昼食時、レベル高く、刺激的、データの意味と解釈、データと結論の間に一義的な関係があるかということが厳しく討論されました。読みが浅いと、翌日、再びです。

ここでの、恥ずかしい話を申しませう。酵素研究の仕事が進み、学内での研究会で発表することになり抄録を書きました。原稿を先生にお見せしたところ、少し見て、ちょっと笑われ、明日まで預かると申されました。翌朝、先生から頂いたのは、すっかり書き直された御自筆の抄録でした。私の原稿は研究の時間経過を追うように書かれていて、症例報告と同じでした。先生は成果と結論の要点と、それを支える実験結果を明確にまとめておられました。すでに学位まで頂いている私です。穴あらば入りたいとはまさにこのことでした。後年、私が同僚に、「論文は日記とは違うよ」などと言うとき、いつもこのことを思い出していました。

1年後、私は東大に移りますが、数年後に、再び京大の早石教室に移り、3名の助教授の1人となりました。3年後の昭和43年に千葉大学に移り、生化学第二教室を担当しました。上に述べたような負の体験を考え、私は、卒前、卒業教育とともに、厳しい教師を務めました。